

体育科・保健体育科

埜本美紀・八反田耕士・梅野栄治・小田啓史

I はじめに

これまで東雲小学校・中学校の体育科・保健体育科（以下、体育科）では、児童・生徒が大人になっても運動・スポーツを継続する素地を培うべく、義務教育9年間の学びがつながる授業づくりのあり方を探究してきた。体育科の研究は、学習指導要領が謳っている「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視する」、「学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る」といった基本方針と一致したものである。

昨年度は、ボール運動・球技領域「ネット型」のバレーボールを研究対象とし、中学校第3学年でバレーボールの充実したゲームができるようにするために、学習指導要領を参考に、各発達段階における「ボール操作」に加えて「ボールを持たないときの動き」の2つの技能について到達目標を整理した（平成26年度要項参照）。2つの技能の質を高める系統的な指導を明らかにしていくために、小学校第1学年から中学校第3学年においてどのような教材が有効であるか（教材の学習可能性）、どのようなアプローチ（指導の工夫）がよいのかを検討し、小・中学校の学びがつながる授業のあり方を探り、一定の成果を得ることができた。

今年度から、新たに「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」という研究テーマのもと、児童・生徒の協働的問題解決を視野に入れながら研究を行っていく。本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」は、先行研究と先進校の取り組みや本校の教育目標から「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義し、その要素として、「主体性（意志決定力）」「多様性（多元的価値観を受容する力）」「協働性（表現・コミュニケーション力）」の3つをキーワードとして挙げている。

体育科では、これらの3要素は、主体性と多様性が相互に関係し合い、そこに協働性が生まれるのだと整理する。主体性は個人が自分なりの考えや答えをもつこと、多様性は、協働的問題解決の場面で、他者の意見や考えを受容し、新たな知識を構築すること、協働性はそれらをつなぐ対話であるにとらえる。これらの3要素が学習過程で出現するような協働的問題解決の場を設定することで、児童・生徒は運動認識（わかる）を獲得する。また、協働的問題解決の場で、自己や他者との対話をくり返し行うことで、運動認識（わかる）を深化させる。さらに、深化した運動認識は、より課題に沿った効果的な「かかわり」を生み出す。そして、深化した運動認識を活用して伝え合うことが、体育科の重点目標である運動技能の獲得（できる）に対して効果的に作用すると考える。

II 本年度の研究計画

1 研究の目的

昨年度まで「わかり方」という認識面のアプローチに指導の重点を置き、「できる」ことの高まりを目指した。しかし、技能の向上のプロセスにおいて、仲間とのどのようなかかわりが学習の中で展開されたかは明らかにできていない。また、技能教科である体育授業の独自性から、運動する時間を確保するため、子どもたちに自ら課題を設定したり、チームで課題を解決するために協働したりする時間を十分保障することができていない。このことから、協働的な問題解決を促進することによって、どのように学んでいるかなどの学びのプロセスを明らかにするだけでなく、子どもたちがより深く考えることで「わかり方」が深化し、技能の向上つまり「できる」につながるのではないかと考えた。

そこで、本校体育科では、昨年度実践した内容を踏まえ、ボール運動・球技領域「ネット型」において、ジグソー法やICTの活用、単元構成の工夫、一単位時間の授業における指導過程の工夫などの手立てを講じることによって、協働的な学びがどのようなプロセスをたどるのかを明らかにし、協働的な学びを促進させるための知見を得ていく。

2 研究の方法

- ・ゲームを記録した VTR 分析
単元前期，中期，後期におけるゲーム中に発揮されるパフォーマンスの比較検討
- ・毎時間の児童のふり返り記述
抽出グループの発話や学習ノートの記述を分析
- ・質問紙による調査
体育授業態度評価（診断的・総括的授業評価）と児童による授業評価（形成的授業評価）の分析

3 研究会当日の授業

- ①小学校 1 年
「アンダーキャッチボール・鬼遊び ー投げる・捕るコツをみつけようー」
- ②小学校 6 年
「ソフトバレーボール ーゲームを整え，得点を決めようー」
- ③小学校複式高学年
「キャッチバレーボール ーボールをつないで，アタックを決めよう！ー」
- ④中学校 3 年
「球技「ネット型」バレーボール ーゲーム分析からチーム課題と解決方法を探るー」

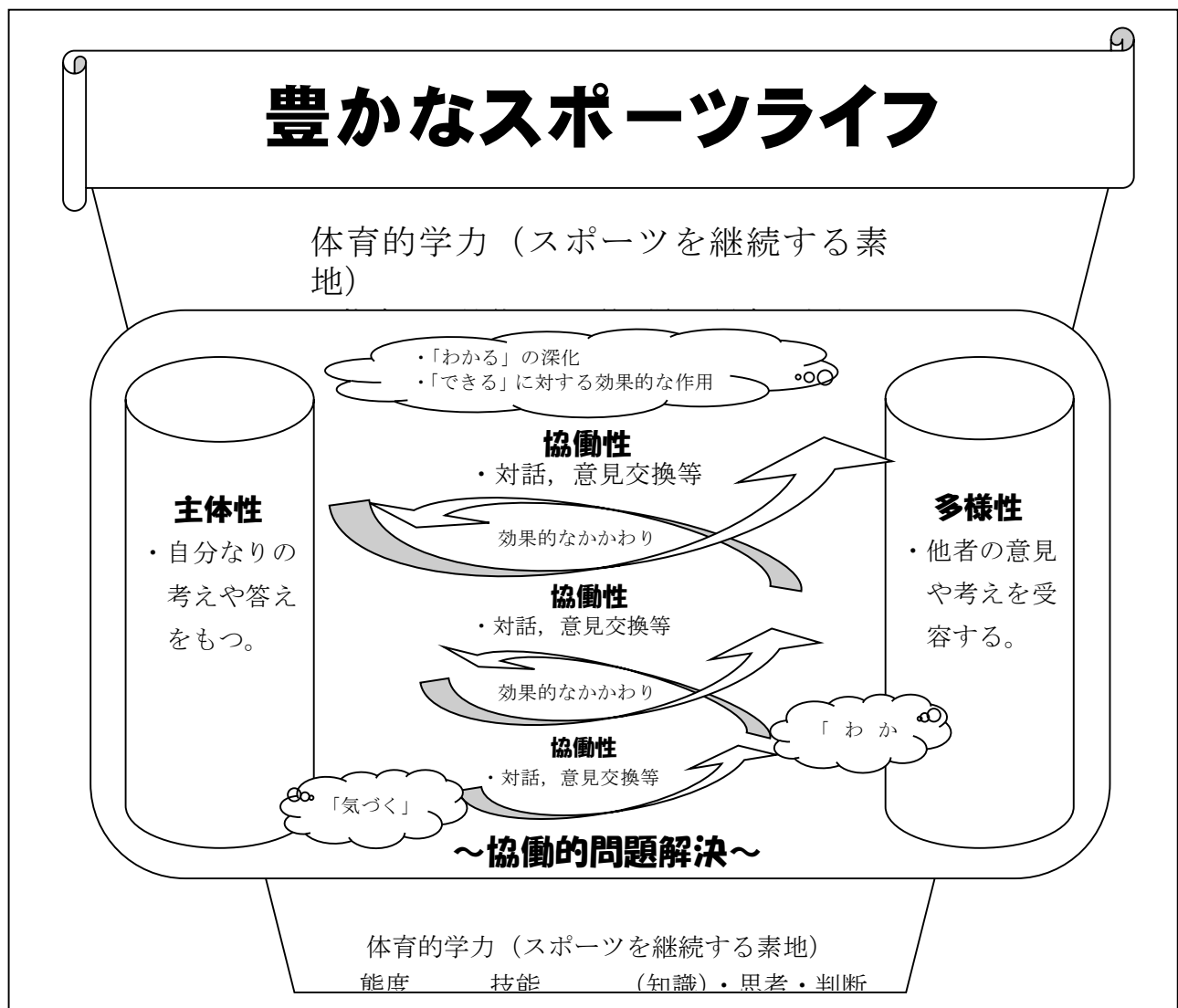


図1 協働的問題解決によるグローバル時代をきりひらく資質・能力の高まり

引用・参考文献

- 小林一久『「できればよい」授業から「わかる」「できる」授業への転換』『学校体育』日本体育社, 1994.
- 小林一久『体育の授業づくり論』明治図書, 1985.
- リンダ・L・グリフィン他『ボール運動の指導プログラムー楽しい戦術学習の進め方ー』大修館書店, 1999.
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 東山書房, 2008.
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』 東山 書房, 2008.
- 高橋健夫『新しい体育の授業研究』大修館書店, 1989.
- 高橋健夫他『新しいボールゲームの授業づくり 体育科教育別冊』大修館書店, 2010.
- http://www.taiiku.tsukuba.ac.jp/sc/3_1/01/result2.html (平成 27 年 10 月 30 日最終確認)
- 国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』, 2013
- 日本教科教育学会『今なぜ、教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくり』文溪堂, 2015
- 中央教育審議会『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』, 2014
- グリフィン, マクゴー, ケア『21 世紀型スキルー学びと評価の新たな形ー』北大路書房, 2014
- 田村学『授業を磨く』東洋館出版, 2015